齋藤　久美子　　*SAITŌ Kumiko*

≪研究ノート≫

エマニュエル・トッド著『家族システムの起源Ⅰユーラシア』をどう読むか

How to Read Emmanuel Todd's L'origine des systèms familiaux, Tome I: L'Eurasie

Keywords: Emmanuel Todd エマニュエル・トッド, family 家族, conservativeness in peripheral zones 周縁地域の保守性原則, status of women 女性の地位, patrilineality 父系制, matrilineality 母系制

In his book, *l'origine des systèmes familiaux, Tome 1: l'Eurasie*, Emmanuel Todd proposed a historical sequence of family types, beginning with the nuclear family, followed by the stem family, and ending up with the community family, by analyzing of the distribution of family types in the Eurasian Continent using the linguistic principle of conservativeness in peripheral zones. He characterized each family type by two pairs of opposite values, liberty (independence from parents) vs. authority (living with parents), and equality vs. inequality in inheritance. The transition between an old family type and a new one was confirmed by replacement of these values. His argument concerning this sequence is consistent and persuasive. However, his assertion that matrilineality emerged as a counter-imitation to patrilineality is hardly acceptable. His explanation does not reflect the result of ethnological research on matrilineal societies, which has shown that a matrilineal society has a more complicated structure than that of a patrilineal society. Also, his description of ancient Egypt is not based on current research in Egyptology.

Since the potential of his family system is highly promising, it is regrettable if these flaws discourage people from reading Todd's book. In this essay, the pros and cons of this book will be discussed in order to encourage an appreciation for Todd's family system in various fields of study.

はじめに

本書は、歴史人口学者エマニュエル・トッド氏による 40 年に及ぶ研究の集大成である。トッドは、前著『第三惑星』(2008) において、「外婚制共同体家族」の分布と「共産主義勢力」の分布がほぼ一致することを発見し、「農村社会の家族構造によって近代以降の各社会のイデオロギーを説明できる」という仮説をたて、検証した。トッドの家族類型は、自由と権威、相続の平等と不平等という二対の価値を掛け合わせたものである。「自由」とは親と暮らさない核家族のことであり、「権威」とは親の権威下にある、つまり親夫婦と子夫婦が同居している拡大家族を表す。核家族と拡大家族は、相続の仕方により、それぞれが、平等主義核家族（自由にして平等）と絶対核家族（自由にして不平等)、共同体家族（権威にして平等）と直系家族[1]（権威にして不平等）に分けられる（102 頁）[2]。そして、権威主義的で平等主義的な共産主義イデオロギーは、外婚制共同体家族の権威主義にして平等主義という共同体家族の根本的価値を受け継いでおり、共産主義革命は共同体家族の社会で起こったと考えている（トッド, 2008:75、78)。

このように、下部構造である家族類型とイデオロギー的・経済的上部構造の間の関連を構造主義的モデルにより説明したのであるが、『第三惑星』の結論では家族類型の分布は偶然であると述べていた（トッド, 2008:292)。しかし、友人の言語学者から「周縁地域の保守性原則」により家族類型の分布は歴史的に

[1] 『第三惑星』では権威主義家族と呼んでいた（トッド, 2008:45)。
[2] 本稿ではトッドの『家族システムの起源』について論じるため、以後、() 内に頁数のみを記した場合は、本書からの引用とする。

説明できるとの指摘を受けた。本書において、各家族類型の分布図を「周縁地域の保守性原則」で解読した結果、未分化な核家族から直系家族を経て共同体家族へいたる変遷が、中国、インド、中東において観察された。

これまでは、核家族は、個人や家族の職業移動や地理的移動を高度に要求する産業社会の要求に適合する社会体系として出現したと考えられてきた（光吉他, 1979:58）。トッドは、家族システムは段階的に単純性から複合性へと変化したとしており、これは、複合性から単純性へ、共同体主義から個人主義へ進んだと考えてきたこれまでの歴史社会学とは対立するものである（213 頁）。

筆者は古代エジプトの研究者として本書に大いに刺激された。今後、本書を参考に研究を進めていきたいと考えているが、本書において述べられた全ての見解に同意できるわけではない。核家族から共同体家族への変遷とそれに伴う父系化の考察は、論理も明確であり評価できる。また、家族類型を特徴づける際に、女性の地位に着目し、各家族類型の特徴がいかに女性の地位を規定し、家族システムの変遷にともない、いかに父系制が強化されていったかについても考察しており、ジェンダー史を考えるうえで興味深い。一方、母系制とアラブ社会の内婚についての解釈には、同意しかねる部分がある。本稿において、同意できる部分と同意しがたい部分とを分け、それぞれ判断の論拠を示すことで、『家族システムの起源』に対する筆者の立場を明らかにしておきたい。

1. 家族システムの変遷の解読

はじめに、トッドがどのように家族システムの変遷を読み解いたのかをみておきたいと思う。ユーラシアにおける家族類型の分布をみると、いくつかの地点で、共同体家族が中央部を占め、その外側に直系家族、さらに周縁部に未分化な核家族が分布していた。「周縁地域の保守性原則」によれば、当初は地域内の全ての住民集団において未分化な核家族が優勢であったが、ある時点で直系家族が生まれ、さらに、中央部で生まれた共同体家族が拡散したと仮定できる。トッドのいう未分化（双方性）とは、夫婦は夫または妻のどちらの家族集団に

加わるか選択できる、柔軟性を特徴とする（44 頁）。一般に、こうした非単系な出自のたどり方を日本の人類学や社会学では双系制と呼んでいる場合が多い[3]。

分布から読み取れた核家族から共同体家族へ至る経緯を、トッドは、自由と権威、平等と不平等という二対の価値を用いて検証していった。直系家族発生の原因は農耕の拡張によると考えられている。土地の開墾が進み、新しい土地が手に入らなくなったことから、子どもは親もとを離れ独立することができなくなった（自由から権威へ）。そして、複数の子どもに分け与えることができなくなった土地は不分割となり、相続は末子相続や長子相続に変わった（平等から不平等へ）（189-194 頁）。共同体家族の発生は遊牧民との接触が原因と考えられている。ステップの遊牧民の父系クランは、男性の対等性（平等）を特徴としていた。遊牧民の父系クランが持っていた平等の概念は、軍事的な組織編制に優位であった。遊牧民との接触を通じて、遊牧民の男性の対等性（平等）が、直系家族（権威、不平等）の不平等と置換され、共同体家族（権威、平等）が生み出された（207-209、213-214 頁）。このように、核家族から直系家族、共同体家族への変遷の理由を説明した。

「周縁地域の保守性原則」による分布と、家族類型を設定する際に用いた、自由と権威、平等と不平等という二対の価値は、共同体家族出現の過程を矛盾なく説明している。文字資料により、共同体家族以前の長子相続の痕跡も確認されており、歴史的な裏付けも行われている。ユーラシア中央の乾燥地帯に暮らす遊牧民の影響が重要であり、その他の地域でも同様の変遷が見られるのかどうかは今後の研究が待たれるが、ユーラシアの説明としては評価できると思われる。

2.「周縁地域の保守性原則」の扱いについて

トッドの解釈に対して想定される批判のひとつは、「周縁地域の保守性原則」

[3] 本書では父系と母系どちらも辿る bilinéaire（二重単系）を双系と訳し、非単系である未分化状態を示す bilatéral を双方性と訳している（840-841 頁）。

を用いている点である。20 世紀初めに言語地理学において確立された「周縁地域の保守性原則」であったが、構造主義の台頭により、言語学や人類学において伝播の過程を分析する研究が下火になったことで、「周縁地域の保守性原則」には時代遅れなイメージがある。しかも、柳田国男が『蝸牛考』において用いた理論である「方言周圏論」が多くの批判を受けている日本においては、「周縁地域の保守性原則」を用いていることに対して疑念が持たれる可能性がある。しかし、柄谷も指摘しているように、トッドは「周縁地域の保守性原則」を回復させたとみるのが正しいと思う（柄谷, 2016:59）。「周縁地域の保守性原則」を用いていることにより、本書は読むに値しないと判断されることは、実に残念なことである。ここで、その有効性を確認しておきたい。

「方言周圏論」では、中央で発生したことばの変化が順次に放射され、周辺に向けて拡散した結果、そこを中心とした同心円的分布が形成されたと考える（大西, 2016:22, 24）。周縁部に古いことばが残るというもので、「周縁地域の保守性原則」に基づいたものである。

「方言周圏論」に対する批判は大きく 2 つに分けられる。まず、ことばの変化は文化の中心地で起こるとは限らず、さらに、同じ場所が繰り返し言語変化の出発地点になることはきわめて稀であり、同心円的分布はめったに起こらないことが指摘されている（大西, 2016:174-175, 181）。しかし、「方言周圏論」に批判的な大西も、同じことばを使っていた共同体に囲まれた真ん中の共同体で変化が発生したなら、一回限り真ん中に新しい分布ができる蛇の目型の分布が生まれることは認めている（大西, 2016: 180-181）。つまり、新しいことばの周辺に古いことばが分布する場合はあり得るということであり、分布から歴史を読みとるという解釈方法は、「近接分布の原則」と「周辺分布の原則」としてモデル化され、言語地理学において継承されている（大西, 2016:178）。

もうひとつ強く批判されてきた点は、柳田の「方言周圏論」は日本を単一文化と見做している点である。「方言周圏論」は、日本のなかの地域差は本来的な系統の別ではなく、一つのものが変遷してきた各段階を示しているとの考えに基づいている（福田, 1992:70）。系統の違いや地域の主体性を考慮していないこ

とに対する批判は、民俗学においても主張された（cf. 大西, 2014:151-152）。「周圏論」は柳田の弟子たちによって「民俗周圏論」や「文化周圏論」に拡張されてしまったと言われているが、柳田自身、「周圏論」ということばこそ使用していないが、「方言周圏論」と同じ考えを繰り返し強調しているのであり、日本の社会は一つで、文化は均質であり、土地ごとの民俗の相違は変遷の各段階を示しているとする考えがうかがえる（福田, 1982:172, 175-177）。柳田は『民間伝承論』のなかで「日本は一国一言語一種族の国ゆえ、国内における整理が楽である」（柳田, 1990:347）と記していることから、日本を単一民族、単一文化であると考えていたことがわかる。「方言周圏論」に向けられた批判は、「周縁地域の保守性原則」ではなく、日本は一つの中心を持つ単一文化であるとする前提といえる。

トッドは、「周縁地域の保守性原則」が万能ではないことを認識している。時には伝播の観念での解釈をあきらめる必要があり、また、習俗や価値観の地理的伝播が単純な地理的分布を生み出すことは滅多にないため、解読には多様なメカニズムを想定することになると述べている（38 頁）[4]。実際、ユーラシア大陸全体を見渡すと核家族が中央部に広がって見えるが、その分布地域は人口密度がきわめて少ないことから、異なる地域に中心を持ついくつかの共同体家族集団の周縁部に分布した核家族同士が、互いに接することで中央に広がっているようにみえたものであると解釈している（148 頁）。共同体家族の発生源を複数設定しており、単一文化論的、超伝播主義的な考え方をしているわけでもない。「方言周圏論」に向けられた批判は、トッドの解釈には当てはまらない。分布の解釈の手始めとして「周縁地域の保守性原則」を使用することに問題はないものと判断できる。

[4] 一例が、母系制は父系制の外側に接して分布しているにも関わらず、母方居住は父系制の接近に対する反動であるとする「異文化の否定的分離反動」である（154 頁）。筆者としては、全ての母系制を父系制への反動とするトッドの意見には賛成しかねるため、後に詳しく見ていきたいと思う。

3. 父系制の強化過程

トッドは以前より、兄弟の関係が平等主義的であるシステムは全体的に女性の地位が低く、反対に不平等主義的なシステムではより女性の地位が高いことを指摘してきた（トッド, 2008:323）。『家族システムの起源』ではそれに通時的な考察が加えられている。核家族から共同体家族へ至るプロセスに沿って、いかに父系化が進んでいったか、平等と不平等の価値を用いて跡付けている。

まず、男女平等な核家族から直系家族に移行すると＜レベル 1 の父系制＞となる。ただし、直系家族がたいていの場合父系である理由をトッドのモデルは説明することができていない（192 頁）。把握できているのは、直系家族の「通常」の父方居住率は 75%であるということである（188 頁）。これは、次のように説明される。人口動態上の確率からすると、夫婦のうち約 20%が、成人に達するまで生き残る息子がいないため、伝承のために組織編制された直系家族では、息子がいない場合、たいていは女系での相続と娘の夫を婿として家系に編入することを容認する（188 頁、371 頁）。その結果が、父方居住率 75%である。＜レベル 1 の父系制＞である直系家族は不平等相続であり、娘だけでなく弟も相続から外されることから、長男とその他の兄弟姉妹が対立することになり、男性対女性の対立とはならず（727 頁）、女性の地位があまり下がらない。

その後、共同体家族になると、相続は男兄弟の間では平等になる。息子がいない場合には、娘による相続は容認されず、兄弟は平等で横のつながりが強いため、父の兄弟や甥など男性父系親族が相続するようになる。父方居住率は 95%を超え、この段階を＜レベル 2 の父系制＞としている（188 頁）。さらに、トッドは、父系共同体家族システムが長く続いた地域において、＜レベル 3 の父系制＞に達したと考えている。それは、中国とロシア、アラビアとモロッコの比較から導きだされたもので、父方居住制への移行が相対的に古い中国とアラビアにおいて女性の束縛（ヴェールの着用、纏足、囲い込みなど）が強いことから、時間の経過が父系制を強化したと考えた（210-212 頁）。

本書の最後で、トッドは各地域の父系制の各レベルの継続期間を表にまとめ、

中東、北インド、中国では父方居住共同体家族という＜レベル 2 の父系制＞のはじまりから、女性の地位の徹底的低下を示す＜レベル 3 の父系制＞への移行までの間は、それぞれほぼ 1000 年であることを指摘している（796-798 頁）。トッドは、3 つの地域でほぼ同じ 1000 年という時の経過を経て第 2 段階から第 3 段階へ移行したことから、その原因を内因性であると考えている（798 頁）。権威主義で平等という価値の組み合わせが、女性の地位の低下を促す傾向があるということである。また、トッドは、中国でいまだに続く男児選好は、揺るぎないものになるために 1000 年かかった心性システムは、簡単には変わらないことを示していると考えている（211 頁）。

日本のイエ制度では女性は従属的な地位にあったとする印象が強いが、トッドの指摘によれば、共同体家族に比べれば女性の地位が高いことになる。平等と不平等の価値の違いや父系制の歴史の深さが女性の地位に与える影響に基づく父系制のレベル分けは、歴史的に女性の地位を考察する際に客観性を持たせるために有益な基準となろう。

4. 反論：母系制は父系制への反動か

上記のように、自由と権威、平等と不平等という二対の価値と「周縁地域の保守性原則」を用いた考察は評価できるのであるが、それ以外の説明になると、説得力に欠ける部分がある。最も同意しがたいのが、母系制についての解釈である。トッドは、母系制は、未分化状態の民族が父系制と接触したことにより、「異文化の否定的分離反動[5]」として生まれたと考えている（154 頁）。トッドが否定的分離反動と考えた根拠は 3 つあり、ギリシャ人による記述の誤り、母方居住家族類型の地理的分布、支配者階級が父系制で平民は母系制である例である。しかし、根拠の 3 点すべてに疑問が残る。

まず、古代において母系制が父系制に先行して存在した証拠として引用され

[5] 本書では、同じ意味で「分離的否定受容」と記されている箇所もある。

てきたギリシャ人による母権制の記述は、実は未分化社会についての記述であったとし、母系制の先行を否定している。ギリシャ人はすでに父系制に移行していたため、女性が高い地位を保持している未分化な住民集団を見ても、それを未分化なものとして正しく知覚することができず、母権的なものとして記述したとトッドは考えている（773 頁）。ギリシャ人の記述が極端で、母権制の記述が母系制ではなかったことは、古代エジプトの例からも明らかである。しかし、ギリシャ人より古い時代の母系制や、ギリシャ人と接触の無かった地域での母系制の存在までは否定できない。

2 つめの根拠は地理的分布であるが、トッドは、母方居住の家族類型の地理的分布は、周縁部的であるが、双処居住よりは中央部の父方居住により近い、つまり、母方居住の住民集団は、父方居住の集団との接触面に現れると指摘している（149 頁）。この分布から、父系モデルに直面した双方的集団が、女性の役割を再確認するという反動を行い、母系制になったと考えている（311 頁）。しかし、母方居住が父方居住に接して外側にあるという分布は、「周縁地域の保守性原則」に従えば、母系制の方が古いことになる。また、父系制に接した双方的集団のうち、多くが父系制に移行するのに対し、どういった場合に母系制への反動が起こるのか説明されていない。母方居住の分布は、父系制に押されながらも母方居住を維持した集団が、父系制の接触面に残っている状態と考えることもできる。

3 点目に、支配者階級が父系制で、平民が母系制である状態を、父方と母方どちらの家族も重要であると考えていた未分化な平民が、支配者の父系居住原則を目の当たりにして、母方居住を選択するという否定的分離反動を行った結果であるとトッドは考えた。中国のナ人（モソ人の 4 つの集団のひとつ : 180 頁）、日本（239 頁）、インド・ケーララのナーヤル（311 頁）、東南アジア（368-371 頁）でこのような反動が見られたとしている。しかし、ケーララのナーヤルはもともと母系制であったところに、ヒンドゥの僧侶であった父系制のナムブドリ・ブラーマンが移住してきて、僧侶を最高のものとするカーストが形成されたとする報告がある（中根, 1970: 309-310）。上流階級が父系制で、民衆が母系

制であるという状態は、もともと母系制であった社会が、父系制の氏族により支配下に置かれた状態である可能性もある。

トッドは、父系原則が「反転」し、母系原則になったというが（180 頁）、母系制は父系制の単なる反転とはいえない。父系制では、財産を所有するのも、家長として財産の管理・運営にあたるのも男性であり、出自、財産、家長の地位の全てが「父から息子」へ継承される。一方、母系制では、女性が財産を所有するが、その管理・運営は女性の兄弟が行う。家長としての男性の地位は、姉妹の息子（甥）が継承するため、出自と財産を継承する「母から娘」のラインと、家長の地位を継承する「オジから甥」のラインが併存する（中根, 2002:85-86）。父系制の相続のラインを反転させるだけでは、母系制にはならない。母系制は父系制に比べより複雑な構造を持っている。父系への反動を「あなた方は、重要なのは夫の家族であると言うが、われわれは、重要なのは妻の家族であると、これまで常に考えていた（182 頁）」とするトッドの表現には十分な説得力があるとは思われない。父系制との接触がなくても、未分化な状態から独自に母系制が発展した可能性も残しておくべきであろう。

トッドは、アラブ社会の内婚も父系制への反動と考えている。内婚は女性の血もまた生まれてくる子どもが何者であるか定義するものであり、双方性の証拠もしくは痕跡であると考え、過激な反女性主義という環境のなかで、双方的つながりを保持するために生まれたというものである(789 頁)。父方居住共同体社会のうちアラブ社会でのみ内婚が生まれた理由は、ひとつの仮説とことわったうえで、プトレマイオス朝時代のエジプトでギリシャ人が行っていた父系内婚の影響であるとしている（790 頁）。しかし、双方的つながりの保持では、父方平行イトコが選好される理由が説明できていない。サウジアラビアを中心とする現在の本イトコ婚の割合が 30%以上と内婚率が高い地域が（684-685 頁）、他のアラブ諸国と比べて女性の地位が高いとは言えず、内婚が反女性主義を和らげているとは思われない。母系制や内婚といった母系のつながりが評価される状態をすべて父系制への反動と考えるのは拙速であろう。

5. 古代エジプトの記述

本書第 12 章の古代エジプトについての論考は、参考になる記述も多いが、大幅な見直しが必要である。トッドは基本的に、夫婦が二組、つまり、親夫婦と子どものうち一人の夫婦が同居している場合は直系家族というように、人口データに基づいて各地の家族類型を導き出している。一方、古代エジプトのように人口データの無い時代については、直系家族の特徴は長子相続制であるから、長子相続制の記録があれば直系家族であったと推測している。したがって、該当地域の最新の研究を参考にしなければ、家族類型を正しく推定することができない。トッドによる古代エジプトの記述は、古い研究を引用し、最新の動向を踏まえていないと言わざるをえない。

上流階級は＜レベル 1 の父系制＞に達していたが、民衆の中では未分化（双方的）な親族システムが存続していたとする評価（765 頁）は、時折ではあるが女王の即位が容認され、女性にも相続権があった古代エジプトの状況をよく反映していると思う。しかし、主に参考にしているピレンヌの研究は古く、そのまま引用するには問題がある。トッドは、ピレンヌが示した中央集権化された統一王朝期には個人主義的家族（核家族）、国家の解体した中間期には長子相続制（直系家族）が現れるとした家族システムのサイクルを支持している（756 頁、764 頁）。国家が機能しない場合は親族集団による扶助が必要ということになり、ピレンヌの示したサイクルは、核家族は国家に依存しなければ成り立たないとするトッドの考え方と馴染みのよいものであった。しかし、ピレンヌによる王朝期は個人主義、中間期は直系家族とする判断は裏付けが不十分であり、また、特に近年研究の進んだ第 2 中間期を考慮しないサイクルは研究現状に合っていない。

図像に見られる男女の地位も、男女がほぼ同じ大きさで描かれることは男女平等を表すと言われていた古い解釈を用いている（766-767 頁）。現在では、男女が同じ大きさで描かれていても、位置関係や向き、場面の構成などから、多くの場合、妻は夫に従属的な立場で描かれていることが指摘されている（Robins,

1994; 齋藤, 2011)。王家の系譜なども最新のものに改められていない (762 頁)。参考文献には最近の研究成果が挙げられているにもかかわらず、自説に都合のよい場合は古い説を用いているように思われる。そうした態度は、家族システムに基づく有益な指摘をも信用ならないものに思わせてしまい遺憾である。

女性の地位上昇を、統一王朝期の核家族化と、近隣の父系制の国々との接触により起こった否定的分離反動によるものとする見解も見直しが必要である。トッドは、統一王朝期は国家が親族の扶助機能を補うため未分化の核家族となり、息子と娘の間での財産分割（平等主義）が行われ、女性の地位は上がると考えている。しかし、女性の地位の上昇は統一王朝期とは限らず、父系制の国々との接触の時期とも必ずしも一致していない。トッドは、新王国時代の女性尊重を、メソポタミアの父系的・反女性主義的な社会との接触から生まれた否定的分離反動と見ているが（771 頁)、それに先立つ、第 2 中間期末の第 17 王朝期にすでに王家において女性の重要性が増しており、この時期の内因的な女性の地位の上昇が新王国時代に与えた影響は無視できない。また、トッドは末期王朝時代の女性の地位の上昇もアッシリア、ペルシャ、ギリシャ人による支配に対する否定的分離反動と考えているが（770-771 頁)、それに先立つ第 3 中間期にすでに女性の地位の上昇が顕著になっている。第 3 中間期の考古学的、美術史的記録は、女性のこれまでにない卓越性を示しており（Li, 2017 passim)、この時期、神の前で礼拝する女性の姿を描いた葬祭碑が多く作られたのは、女性の力が増したことによるものと解釈されている（Li, 2017:120)。

トッドは、古代エジプトを、母方重視や女性の地位の上昇を父系制への否定的分離反動とする自説を補強する例としたかったものと思われる。しかし、父系制への否定的分離反動では、なぜ特定の地域でのみ母系制が生まれたのかを説明できていないのと同様に、父系制国家に征服された多くの地域が父系化されていったなかで、なぜエジプトだけが父系化の波に飲み込まれなかったのかが説明されていない。むしろ、トッドの自由と権威、平等と不平等という二対の価値を用いて家族類型の変遷を説明する方法こそが、内因性の親族構造の変化を説明し、古代エジプトの独自性を解明する手がかりになるのではないかと

思う。今後の課題としたい。

おわりに

自由と権威、平等と不平等という二対の価値は、農耕の拡張により生じた土地の相続問題と、遊牧民との接触によりいかに家族システムが変化していったかをうまく説明している。しかし、この家族システム論も万能ではなく、母系制の問題を論じることができなかった。そこでトッドが導入したのが、父系制に対する否定的分離反動という考え方であるが、上述したように母系制や内婚については、説得力のある説明にはなっていない。歴史人口学の手法と自由と権威、平等と不平等という二対の価値に基づく家族システムの変遷は支持できるが、否定的分離反動を用いた母系制の説明は支持できないというのが筆者の立場である。

トッドが用いた人口データは、同一の基準で採取したものではなく、各地域の専門家からは異論がでるかもしれない。家族が全ての地域で同じ変遷をたどったわけもなく、今後例外が指摘されてゆくことになるであろう。しかし、ユーラシア中央の乾燥地帯で生まれた遊牧民の生活に根差した権威と平等という価値が、ユーラシア全体の家族システムの変遷や近代のイデオロギーにまでつながっているとする見解は、ひとりの研究者がひとつの観点から広い地域を俯瞰したからこそ得られたものである。例外があるからといって、全てを否定するのではなく、トッドが示した家族の変遷を参考にして、同じなのか、違うならばどう違うのか、なぜ違うのかを問うことで、各地域の独自の歩みを明らかにしていくことが人類の家族史を解明していくうえで建設的であると思う。自由と権威、平等と不平等という価値からはこのような家族システムの変遷が読み取れたがどう思うかと、トッドは問いかけているように思う。本書をたたき台として、今後、各地域・時代の専門家によって検証が進み、議論が深められることを期待したい。

引用文献

柄谷行人, 2016「思想の散策 13　続双系制』『図書』2016 年 9 月号　岩波書店, 56-59.

大西拓一郎, 2014 「言語地理学と方言周圏論、方言区画論」小林隆編『柳田方言学の現代的意義－あいさつ表現と方言形成論』ひつじ書房, 145-161.

大西拓一郎, 2016 『ことばの地理学－方言はなぜそこにあるのか』大修館書店.

齋藤久美子, 2011「視覚化された女性の劣位：古代エジプト美術に見るジェンダー表現」『エジプト学研究』第 17 号, 早稲田大学エジプト学会, 89-98.

トッド,エマニュエル 2008 『世界の多様性』萩野文隆訳　藤原書店（原著 Todd, Emmanuel. *La diversité du monde*. Paris: Éditions du Seuil, 1999.『第三惑星』（*La troisième planète*, 1983）と『世界の幼少期』(*L'enfance du monde*, 1984)が合冊として再版されたもの。）

トッド,エマニュエル 2016 『家族システムの起源 I ユーラシア　上下』石崎晴巳監訳　藤原書店（原著 Emmanuel Todd, L'origine des systems familiaux, tome I: L'Eurasie, Paris: Éditions Gallimard, 2011）.

中根千枝, 1970『家族の構造：社会人類学的分析』東京大学出版.

中根千枝, 2002『社会人類学：アジア諸社会の考察』講談社学術文庫.

福田アジオ, 1982「方言周圏論と民俗学」『武蔵大学人文学会雑誌』第 13 巻第 4 号, 167-188.

福田アジオ, 1992『柳田国男の民俗学』吉川弘文館.

光吉利之・土田英雄・宮城宏, 1979『家族社会学入門』有斐閣新書.

柳田國男, 1990『柳田國男全集』第 28 巻　ちくま文庫.

Li, J. *Women, Gender and Identity in the Third Intermediate Period Egypt: The Theban Case Study*, Abingdon & New York: Routledge, 2017.

Robins, G. "Some Principles of Compositional Dominance and Gender Hierarchy in Egyptian Art," *Journal of American Research Center in Egypt* 31, 1994, 33-40.